慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	赤本『〔絵本東海道〕』について : 影印と翻刻
Sub Title	The Akahon "Ehon-Tokaido", with transcription and bibliographical notes
Author	津田, 眞弓(Tsuda, Mayumi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2009
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.44 (2009.) ,p.197- 209
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料紹介 挿図
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20090000-0197

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

赤本『〔絵本東海道〕』について——影印と翻刻

津田眞弓

はじめに

本年度に開催された慶應義塾一五〇周年記念高橋誠一郎浮世絵コレクション展に際し、関連企画として、斯道文庫及び三田メディアセンター貴重室を会場に慶應義塾蔵の東海道に関する和本と浮世絵を閲覧するワークショップを行なった。本資料は、その時の調査で知り得たものである。赤本の書誌を網羅した木村八重子氏『赤本黒本青本書誌　赤本以前之部』（日本書誌学大系九十五－一、青裳堂書店、二〇〇九年）に記載がない新出資料なので、ここに詳細を報告したい。

書誌と解題

■所蔵　慶應義塾大学三田メディアセンター（一二七／五一／一、旧蔵者は波多野元武氏、昭和五年二月六日寄贈）

■書型・丁数　中本（縦十七・六×横十二・八㎝）・十丁

■表紙　改装か（ただし丹色無地、絵題簽の跡が残る）

■外題　打ち付け書き「絵本東海道」（仮題とする）

■柱題　「道中　一～〔十〕」（三・十丁目の丁付は欠損）

■画作者名・刊年　なし

■板元　「通油丁　いせ屋」（伊勢屋金兵衛）

内容は、東海道の道中記を材とした赤本。一丁から九丁が東海道、残りの一丁を四日市からの伊勢街道に当てている。東海道の部分については、品川より川崎へ二里半のように道中記めかして各宿場名を出し、一丁に三つの宿を盛り込んで名所・名物などを示す。また風景中の人物に台詞が散見する。

木村氏『赤本黒本青本書誌』によると、道中記ものの赤本は数が少なく、知られている所では享保三・四年頃刊の『福神いせ道中』（近江屋板）がある。こちらは白鼠の伊勢道中で、七福神と悪役の猫を配し、名所を挙げるだけでなく、笑いや実在の歌舞伎関係者を出すなど流行や風俗を盛り込んだ内容になっている。本作にはそのような仕掛けはなく、名所の紹介と旅の風景の中の人物が大様に描かれる。その意味では、同書よりさらなる古体と感じられる。

また『福神いせ道中』は図の描き様が途中から道中双六の形式に近くなる。木村氏が関わった『近世子どもの絵本集』で指摘されるように人物中心に作られている点も道中双六に通じよう。[1]しかし、本作は細長いコマに絵を収める道中双六の形式をとらない。さらに言えば、宿場名を掲げて道中記を真似ているが、絵地図式道中記のように道を続けず山を画面の区切りに用い、宿場の配置も道順に並べず、散らし書きのように置いている。この点、雲で場面を区切る屏風絵や絵巻とも一線を画す。むしろ、異なった場面や時間の出来事を一つの画面に収めてしまう初期の草双紙らしい描き方と言えようか。道中記に関して、絵の雰囲気が最も近いのは、今井金吾氏が絵地図式道中記の濫觴と言われる『諸国安見回文之絵図』（伝菱川師宣画、貞享二年以前刊）だが、[2]文言も含めて何を参照して成ったものか後考を期したい。

影印と翻刻

凡例

一、第二丁と第三丁が入れ替わって綴じられているため、本来あるべき場所に直して影印を掲出、翻刻した。

一、地名は原則として、東海道の順に従って配置した。

一、（　）は翻刻者の注を意味する。

一、翻刻は読みやすさを考え、濁点や読点を補い、適宜ひらがなを漢字に直した。

一、漢字は現行の文字を用い、「ゟ」は全て「より」とした。

一丁表

【二丁表】

日本橋より品川へ二里

品川より川崎へ二里半

（駕籠かき）「よい時分のお上り（欠）」

江戸六地蔵一番目。鈴の森。

池上。六郷舟渡し。

川崎より神奈川へ二里半

一丁裏・二丁表

【一丁裏】

宿の前より左、大師河原の道、有。
鶴見の焼餅、名物。鶴見橋。
（茶店の者）「京上りか。ちと休ましやれ」
神奈川より（保土ヶ谷壱里（欠））
富士の人穴。浅間の社。
保土ヶ谷より（戸塚へ二里）
新町の前左、鎌倉道（みち）、有。鎌倉。
焼餅坂。（道標）「武蔵」「相模境」
戸塚より（藤沢へ二里）

【二丁表】（原本では三丁表）

藤沢より（平塚へ三里余）
遊行寺。小栗墓、有。大山道（みち）。石の不動、有。
馬入舟渡し、有。
平塚より（大磯へ廿七丁）
唐ヶ原。権現の社。大磯長者屋敷跡。鴫立沢。
石の化け地蔵、有。
大磯より（小田原へ四里）
（欠）な（欠）つの（欠）。

二丁裏・三丁表

【二丁裏】（原本では三丁裏）

梅沢

小田原より［箱根へ四里］

小田原城（看板）「外郎」「郎」。う（欠）郎、名物。

湯本。塔ノ沢。西海子坂。「御関所」。

箱根より［三島へ三里廿八丁］

三島明神。

三島より［沼津へ壱里半］

千貫樋。

【三丁表】（原本では二丁表）

沼津より［原へ壱り半］

千本松原。

原より［吉原へ二里十六丁］

浮嶋ヶ原。

吉原より［蒲原へ二里廿八丁］

富士の白酒、名物。こゝより富士山よく見ゆる。

富士川舟渡し。

三丁裏・四丁表

【三丁裏】（原本では二丁裏）

蒲原より（由比へ 壱里）

塩焼浜。

由比より（興津へ 二里）

此間に由比川、有。分（わかれ）の明神。

薩埵峠。親不知。子不知。

興津より（江尻へ 壱里半）（店の看板）「膏薬」。

十七間の梅。清見寺。

【四丁表】

江尻より（府中へ 二里廿丁）

府中より（丸子へ 壱里半）

府中御城。

（旅人）「もはや昼過でござる」

（看板）「安倍川もち」

（茶店の客）「うまい事の」

安倍川かち渡し。

丸子より（岡部江 二里）

宇津ノ山、名所。

（店内、看板）「宇津ノ谷」「十団子」

四丁裏・五丁表

【四丁裏】

岡部より藤枝へ壱里廿六丁

（道端で休む旅人）「是はよい所で会いました」

（飛脚）「江戸に変わる事もござらぬ」

藤枝より島田へ二里

瀬戸の染飯。

島田より金谷へ壱里

大井川。

（大井川岸の駕籠の客）「よほどの水じや」

【五丁表】

金谷より日坂へ壱里卅丁

此間菊川、有。小夜の仲山。夜泣きの松。

名物、わらび餅。

（茶店前の馬子）「旦那乗らしやれ」

日坂より掛川へ一里廿九丁

雄鯨山。雌鯨山。

掛川より袋井へ二里十六丁

浅間。

五丁裏・六丁表

【五丁裏】

袋井より 見付へ 壱里半

（雨中の旅人）「強い雨じや」

見付より 浜松へ 四里八丁

（人足）「やれ舟がでるは」

（飛脚）「急げ〳〵」

天竜舟渡し。

右に本坂街道。峰の薬師道、有。

浜松より 前坂へ 二里半余

【六丁表】

舞坂より 新居へ 一里十八丁

此間、舟渡し。

新居より 白須賀へ 一里廿四丁

（看板）「御関所」

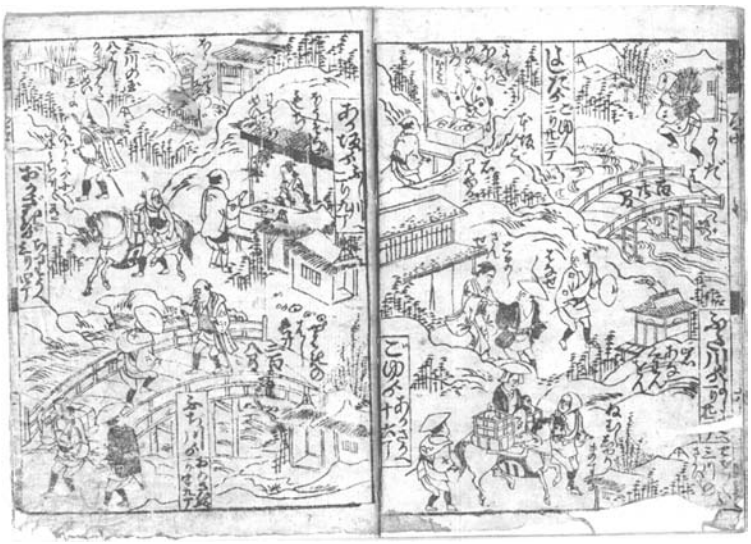
町はづれ、浜名の橋の跡、有。

橋本。

白須賀より 二川（欠） 一里十七（欠）

高師（たかし）山。

六丁裏・七丁表



【六丁裏】

遠江三川の境。

二川より吉（欠）へ一里廾（欠）丁

岩穴観音。

（母子を乗せる馬子）「眠らしやりますな」

吉田より御油へ二里廾二丁

吉田橋、百廾間。吉田、火口（ほくち）、名物。（看板）火口。

本坂越、右見ゆる。

御油より赤坂へ十六丁

（旅人）「放なせ〳〵」

（客引き女）「泊まらさんせ」

【七丁表】

赤坂より藤川へ二里九丁

法蔵寺。法蔵寺餅。草鞋、名物。

藤川より岡崎へ一里半九丁

岡崎より池鯉鮒へ三里四丁

矢作の橋、長サ二百八間。

三川の国。八橋。杜若、名所。海道より北へ半道程有。

七丁裏・八丁表

【七丁裏】

右の野にて四月、馬市立つなり。

池鯉鮒より 鳴海へ 二里廿八丁

三川尾張境。

鳴海より 宮へ 壱里半

笠寺観音。

宮より 桑名江 舟の上七里

海上七里、舟渡し。

（船上の客）「よい凪でござる」

【八丁表】

桑名より 四日市へ 三里八丁

（焼蛤を食べる人々）焼蛤、名物。

四日市より 石薬師へ 二里廿五丁

追分左、伊勢参宮道。

名物、杖衝饅頭。

（茶店の女）「上がりませ」

石薬師より 庄野へ 廿五丁

薬師堂。鈴鹿川より流る川。

八丁裏・九丁表

【八丁裏】

庄野より亀山へ二里

焼米、名物。小さき俵に入て売るなり。（看板）焼米。

亀山より関へ壱里半

亀山の城。関川。

関より坂の下へ一里廿四丁

【九丁表】

坂の下より土山へ二里半

鈴鹿明神。蟹ヶ坂。田村の社。

土山より水口へ二里廿五丁

（太鼓をたたく者）「お江戸の殿様舞つたり〳〵」

（鉦をたたく者）八柄鉦。

（見物人）「よく舞ふことじや」

右に北国街道、有。

水口より石部江二里廿六丁

水口の城。水口、煙管、名物。

（客）「土産に買いませう」

九丁裏・十丁表

【九丁裏】

石部より（草津へ三里）

梅の木。和中散、名物。（看板）和中散。

（看板）「女川菜飯」。

三上山。

草津より（大津へ三里廿四丁）

姥ヶ餅。瀬田の橋。石山。粟津ヶ原。

大津より（京まで三里）

【十丁表】

伊勢参宮（みちのり）

四日市より（神戸江二里卅五丁）。神戸より（白子へ壱里半）。白子より（上野へ壱里半）。上野より（津へ二里半）。津より（雲出へ二里）。雲出より（松坂へ二里）。松坂より（小俣へ四里）。小俣より（山田へ壱里）。山田より（内宮へ壱里）。

白子観音。不断桜。（欠）う（国府カ）の阿弥陀。

明星の茶屋。（店内）清めの茶。

（旅人）「常はないか」

（旅人）「抜けま（欠）」

十丁裏

【十丁裏】

山田。外宮。天の岩戸。間（あい）（欠、之カ）山。
内宮。宇治橋。朝熊（あさま）山。
（宇治橋の下で賽銭を取る人々）「こゝへも〳〵」
（三味線の前の見物客）「さつても弾いたり」
（同、見物客）「よい女どもじや」
（商標、〇に三つの黒丸）通油丁いせ屋[3]。

注

（1）鈴木重三氏・木村八重子氏『近世子どもの絵本集　江戸篇』（岩波書店、一九八五年）

（2）今井金吾氏「道中記の発生と発展」『道中記集成』別巻三（大空社、一九九八年）

（3）井上隆明氏『改訂増補近世書林板元総覧』（青裳堂書店、一九九八年）により、屋号と店舗の場所、商標から「伊勢屋金兵衛」と判断した。同店には赤本・黒本の作がある。

付記：本稿は二〇〇九年度経済学部研究教育資金研究助成による共同研究「慶應義塾大学蔵文化財を活用する指導法開発と教材作成に関する総合的研究――高橋誠一郎浮世絵コレクションを端緒に」の成果の一部である。貴重なご助言を賜った木村八重子氏に心より感謝申し上げる。またワークショップに関して御協力くださった斯道文庫主事佐々木孝浩氏と同文庫スタッフ諸氏及び桑野あさひ氏に、同じく開催の御協力と資料掲載を許可くださった慶應義塾大学三田メディアセンターに御礼申し上げる。